

## 『変身物語』におけるスキュラと aura の関係

服部桃子

(西洋古典学専門 / 博士後期課程)

### はじめに

メガラはクレタとの戦局にあった。開戦後半年が過ぎようとした頃、王女スキュラは敵国の王ミノスに惚れこんでしまう。敵であるにも関わらずミノスを勝たせたいという思いが募り、彼女は父であるメガラ王ニーススの緋色の髪一房を差し出すことを思いつく。ニーススの髪は国家の安全を保証するものであった。策略通りスキュラは父の髪を切り取り、敵陣に忍び込んでミノスにそれを差し出し、同時に愛を告白した。しかしミノスは贈り物も彼女も拒絶した。ミノスはメガラから立ち去るが、スキュラはミノスの乗る船に向かって非難の言葉を叫びながら追う。最後は尾白鷲に変身した父からの攻撃を受けつつ、自身も鳥に変身した。

以上が、ローマ詩人オウィディウス(Publius Ovidius Naso, 前 43-後 17)の著作『変身物語 (Metamorphoses)』で語られるスキュラの神話の内容である。この作品は全 15 巻を通して大小約 250 もの神話を途切れることなく語る、変身を主題とした叙事詩であり、スキュラの物語はその第 8 巻 1-151 行に存在する。

先述したとおり、スキュラも最後は鳥に変身する。彼女が変身する瞬間は次のように書かれている。

illa metu puppim dimisit, et aura cadentem  
sustinuisse levis, ne tangeret aquora, visa est.

彼女は恐怖で船から手を離れた。落ちていく彼女を軽やかな空気が海面に触れぬよう支えたように思われた。<sup>1</sup>(Ov. Met. 8. 148-49)<sup>2</sup>

この箇所について、Anderson は次のような注釈を付けている。「(海面に触れないようにした) 目的は、彼女(スキュラ)がさらに海水を汚すのを防ぐためとも、彼女を溺れることから救うためとも解釈されうる。オウィディウスはそれを明らかにするのを拒んでいる。彼は彼女の情熱をはっきりと尊びはしないが、今後 sea eagle に苦しめられると決めつけてもいない。」<sup>3</sup>オウィディウスはスキュラとその父の変身後については一切触れていない。この神話の結末は曖昧にされたままなのである。そしてその曖昧さゆえ、スキュラの変身を「脱出<sup>4</sup>」と見るか「罰<sup>5</sup>」と見るかで研究者の解釈は分かれる。ただし、今までの研究者たちは変身にそのような意味付

<sup>1</sup> 本稿における古典ギリシア語・ラテン語テキストの和訳は全て筆者による試訳である。

<sup>2</sup> 以降、『変身物語』のスキュラの物語から本文引用する際は、作家名・作品名・巻数の表記を省略する。

<sup>3</sup> Anderson, William S. 1972. *Ovid's Metamorphoses, Books 6-10*. Norman, p.347. 括弧内は筆者による補い

<sup>4</sup> Nugent, S. Georgia. 2008. "Passion and progress in Ovid's « Metamorphoses »." *Passions and moral progress in Greco-Roman thought*: 153-174. p.161; Forbes Irving, P. M. C. 1990. *Metamorphoses in Greek Myths*. Oxford University Press, p.228

<sup>5</sup> Fratantuono, L. 2012. *Madness Transformed: A Reading of Ovid's Metamorphoses*. Lexington, p.216

けをしながら、『変身物語』での記述内容の詳しい分析はしていなかった。

本稿では、他のスキュラ神話に関する文献資料と比較しながらオウイディウスのオリジナリティをあぶり出し、オウイディウスが彼女の行為—父の髪を切り取ったこと—をどう捉えているかを考察する。そして、スキュラの変身が「罰」か「脱出」かという今までの議論から一步踏み出し、改めて鳥への変身が何を意味しているかを検討していく。その中で、先程引用したAndersonの注釈にもあるaura<sup>6</sup>の役割も考えていきたい。

なお、『変身物語』のスキュラの物語の構成は以下のようになっている。

- 1-10      メガラとクレタの戦争、ニーススの髪についての説明
- 11-43     六ヶ月後、スキュラがミノスを見初めて恋に落ちる
- 44-80     スキュラの最初の独白
- 81-89     スキュラがニーススの髪を切り取り、ミノスに差し出す
- 90-100    スキュラの愛の告白とミノスの呪詛
- 101-107   ミノスがメガラを去ろうとし、スキュラ発狂
- 108-142   スキュラの二度目の独白
- 143-151   ニーススの追尾とスキュラの変身

### スキュラ神話の筋書き

オウイディウスは『変身物語』の執筆にあたってほとんどの神話を当時知られていたであろうヴァージョンから多少改変しており、スキュラの神話も例外ではない。まずここでは、古典文学においてスキュラ神話がどのように語られてきたか、執筆年代順に追ってその変遷を辿り、オウイディウスの記述と比較する。

スキュラに関する記述がある最も古い文献は、古典期ギリシアの悲劇作家アイスキュロスによる悲劇『供養する女たち(原題:choephoroi)』である。その内容は以下のとおりである。

ἄλλαν δεῖ τιν' ἐν λόγοις στυγεῖν  
φοινίαν κόραν,  
ἅτ' ἐχθρῶν ὑπαί  
φῶτ' ἀπόλεσεν φίλον Κρητικοῖς  
χρυσοκμήτοισιν ὄρμοις  
πιθήσασα δάροισι Μίνω,  
Νῆσον ἀθανάτας τριχὸς  
νοσφίσασ' ἀπροβούλωσ  
πνέονθ' ἀκυνόφρων ὕπνω.  
κιγχάνει δέ μιν Ἑρμῆς.      (Aesch. Ch. 613-622)  
もうひとり、忌み嫌うべき女が伝わっている。  
血にまみれた娘だ。  
敵のために

<sup>6</sup> 水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』(研究社, 2009)では「1 風;微風. 2 空気, 大気. 3 空, 天」という訳語が紹介されている。

親しい人々に破滅をもたらした。クレタの  
黄金の首飾りに、  
ミノスからの贈り物にほだされて、  
ニーソスから不死なる髪を  
奪った。何も知らずに  
寢息を立てる父から、心を犬にして。  
そしてヘルメスが彼を迎えた。

最古の資料であるこの箇所によれば、スキュラがニーソスの髪を切り取った動機はもともと「贈り物にほだされて」であった。これが恋へと変わるのは、ヘレニズム期の詩人カリマコス以降である。カリマコスの詩の断片では、「恋に焦がれた娘スキュラは偽りの名を持たず、緋色の髪を切り取った。(Σκύλλα γυνή κατακάσα καὶ οὐ ψόθος οὔνομ ἔχουσα πορφυρέην ἤμησε κρέκα, Cal. Hec. Fr.288)」と書かれている。ただし、アイスキュロスもカリマコスも父娘の変身には触れていない。アイスキュロスが「ヘルメスが彼(=ニーソス)を迎えた」すなわち彼は死んで冥界へ送られたと書いているところから、彼らの時代にはまだ変身するという筋書きが存在しなかったとも考えられる。

スキュラおよびニーソスの変身が初めて言及されたのは、オウィディウスの先輩詩人にあたる叙事詩人ウェルギリウスの『農耕詩(Georgica)』においてである。

apparet liquido sublimis in aere Nisus  
et pro purpureo poenas dat Scylla capillo:  
quacumque illa levem fugiens secat aethera pinnis,  
ecce inimicus, atrox, magno stridore per auras  
insequitur Nisus; qua se fert Nisus ad auras,  
illa levem fugiens raptim secat aethera pinnis. (Verg. G. 1.404-09)  
澄み渡る空の高く、ニーソスが現れて、  
スキュラは緋色の髪による罰を受ける。  
彼女が逃げながら軽い空気を翼で切るところを  
ほら、敵意を持つニーソスが、荒々しく、大きな音を立てて  
空中を追う。ニーソスが空中へ舞い上がると  
彼女は逃げながら軽い空気を翼で切る。

『農耕詩』では変身に至るまでの顛末が書かれていないものの、怒った父が娘を追いかけるといふ今までにない筋書きが現れる。そして 406-09 行は、『農耕詩』とほぼ同時期に書かれた伝ウェルギリウスの小叙事詩『キーリス(Ciris)』の最後の 4 行と完全に一致している。『キーリス』では、スキュラがミノスに恋し、父の髪を切り取り、変身して父に追われるという、おそらくこの時代に最も主流であった筋書きに基づくスキュラ神話の一部始終が語られる。中でもスキュラの変身後を総括しているのが以下の箇所である。

impia prodigiis ut quondam exterrita amoris

Scylla novos avium sublimis in aere coetus  
viderit et tenui conscendens aethera pinna  
caeruleis sua tecta supervolitaverit alis,  
hanc pro purpureo poenam scelerata capillo,  
pro patris solvens excisa et funditus urbe. (Pseudo-Virgil *Ciris* 48-53)

かつて愛の兆しにおびやかされ、親不孝な  
スキュラは、空高くに鳥たちの新たな集まりを  
見て、柔らかな羽根で空へ昇りながら  
空色の翼で自分の家の上を飛んでいた。  
罪で穢れた彼女は、緋色の髪と  
父の町を徹底的に滅ぼしたことに対する罰を受けている。

スキュラは変身した後、父に追われながら「罰を受けている」と語られる。『農耕詩』以降は  
このように、スキュラが父の髪を切った後も物語が継続していく。

もう1つ、ローマ文学においてスキュラの神話を伝えているのが、紀元後2世紀頃の作家  
ヒュギヌスによる『神話集(Fabulae)』である。

Nisus Martis filius, sive ut alii dicunt Deionis filius, rex Megarensium, in capite crinem purpureum  
habuisse dicitur. Cui responsum fuit tamdiu eum regnaturum quamdiu eum crinem custodisset.  
Quem Minos Iovis filius oppugnatum cum venisset, a Scylla Nisi filia Veneris impulsu est amatus,  
quem ut victorem faceret patri dormienti fatalem crinem praecidit. Itaque Nisus victus a Minoe est.  
Cum autem Minos Cretam rediret, eum ex fide data rogavit ut secum aveheret. Ille negavit Creten  
sanctissimam tantum scelus recepturam. Illa se in mare praecipitavit, ne persequeretur.  
Nisus autem dum filiam persequitur in avem haliaeton, id est aquilam marinam conversus est,  
Scylla filia in piscem cirim quem vocant, hodieque si quando ea avis eum piscem natantem  
conspexerit, mittit se in aquam raptumque unguibus dilaniat. (Hyg. F. 198)

マルスの息子、別の者たちが言うにはデーイオーンの息子であるニーススはメガラの王で  
あり、頭に緋色の髪を持っていたと言われる。その髪を守っている限りは国を支配するだ  
ろうという神託が彼にはあった。

ユピテルの息子ミノスが彼を攻撃しに来た時、ミノスはウェヌスの衝撃を受けたニースス  
の娘スキュラによって愛され、スキュラは彼を勝者にするために眠っている父から運命の  
髪を切り取った。そしてニーススはミノスに打ち倒された。

ミノスがクレタへ戻る時、約束を結んだ彼女は自分を一緒に連れて行くようミノスに頼ん  
だ。ミノスは、この上なく神聖なクレタがそのような罪を受け入れることはない拒んだ。  
スキュラは追われないように海へ身投げした。

しかし、ニーススは娘を追ううちに尾白鷲という海の鷲に変身し、娘スキュラはキーリス  
と呼ばれる魚に変身した。今日も、その鳥が、その魚が泳いでいるのを見た時には、水中  
に飛び込んでつかみ、鉤爪で引き裂くのである。

ここでもやはり、スキュラの凶行のきっかけはミノスへの恋であり、その後は鳥に変身したニ

ーススに追われ、彼女自身も変身することになっている<sup>7</sup>。

上に挙げた3つの作品では彼女の変身が語られたが、さらに他の文献も見ると、鳥への変身は重要な要素ではなかったと思われる。

紀元後1、2世紀頃に編集されたとされる神話の概要集『ビブリオテケー』<sup>8</sup>には次のような記述がある。

ἀπέθανε δὲ καὶ Νίσος διὰ θυγατρὸς προδοσίαν. ἔχοντι γὰρ αὐτῷ πορφυρέαν ἐν μέσῃ τῇ κεφαλῇ τρίχα ταύτης ἀφαιρεθείσης ἦν χρησμός τελευτήσαι: ἡ δὲ θυγάτηρ αὐτοῦ Σκύλλα ἐρασθεῖσα Μίνως ἐξεῖλε τὴν τρίχα. Μίνως δὲ Μεγάρων κρατήσας καὶ τὴν κόρην τῆς πρύμνης τῶν ποδῶν ἐκδήσας ὑποβρύχιον ἐποίησε. (Apollod. 3. 15. 8)

ニーススもまた娘の裏切りによって死んだ。頭の真中にある緋色の髪ゆえ、それを抜かれると死ぬと予言は言っていた。彼の娘スキュラはミノスに恋し、髪を引き抜いた。ミノスはメガラをくだし、娘の足を船尾に縛り付けて水に沈めた。

アポロドーロスによるこの文献の記述によれば、ニーススもスキュラも変身しないことになっている。またこの作品では、ニーススがスキュラを追いかけるのではなく、ミノスがスキュラを海で殺したという説を採っている。同様の説が、紀元前1世紀のギリシアの地理学者ストラボンの『地誌』に記されている。

φασὶν ἀπὸ Σκύλλης τῆς Νίσου θυγατρὸς, ἣν ἐξ ἔρωτος προδοῦσαν Μίνω τὴν Νίσαιαν καταποντωθῆναί φασιν ὑπ' αὐτοῦ, δεῦρο δ' ἐκκουμανθεῖσαν ταφῆς τυχεῖν. (Strab. 8.6.13)

ニーススの娘スキュラについて彼らはこう語る。彼女はミノスへの恋からニーススの国を裏切ったのだが、ミノスによって海に投げ込まれ、波打つこの場所に葬られた。

ここまでで挙げた全ての文献の記述に共通するのは、スキュラは父の髪を抜いたことで少なくとも彼女にとって幸福とはいえない結末を迎えたということである。『キーリス』にある文言どおり「罰を受け」た状態であると言ってもいいだろう。これがオウィディウスの時代に完成されていた筋書きであるとするれば、当時の読者がスキュラの物語を読み始めた時に想定する結末もまた、スキュラは最後に罰を受けるというものであるはずだ。そして、彼女に罰を下す者は、ニーススが死んだ場合はミノスであり、変身した場合はニースス自身であった。

### より罪深いスキュラと怯えるミノス

敵であるはずのミノスに恋し、父の髪を切り取ったスキュラは、鳥に変身した父に襲われた。オウィディウスが語ったスキュラ神話は、その筋書きに限れば他のものと大差ない。しかし、細かなところで他と異なる、オウィディウス独自の考えに基づくと思われる点はいくつか見ら

<sup>7</sup> スキュラが魚に変身するという記述はここでしか見られず、その典拠も明らかでない。cf. Forbes Irving p.228

<sup>8</sup> 執筆年代は紀元後であるが、著者アポロドーロスが神話伝承の典拠としたものは全て紀元前5世紀以前の作家による。cf. 高津春繁訳『アポロドーロス ギリシア神話』(岩波文庫、1953)p.7

れる。そしてそのいくつかの点は、物語の中核を成すスキュラとミノスの人物像に関わっている。

まず、スキュラの人物像形成に関わっているのがニーススの緋色の髪の本質である。『コエーポロイ』では「不死なる髪(ἀθανάτας τρίχός)」と表されており、『ビブリオテーケー』では「(ニーススは)その緋色の髪を抜かれると死ぬ(τρίχα ταύτης ἀφαιρεθείσης ἦν χρησμός τελευτήσαι)」と言われている。これら2つの記述からでは、ニーススの髪はニーススの命そのものと結びついていると考えるべきであろう。一方『キーリス』ではこのように書かれている。

nam capite a summo regis (mirabile dictu)  
candida caesaries (florebant tempora lauro),  
et roseus medio surgebat vertice crinis:  
cuius quam servata diu natura fuisset,  
tam patriam incolumem Nisi regnumque futurum  
concordes stabili firmarant numine Parcae. (Pseudo-Verg. *Ciris* 120-125)

というのも、王の頭頂から(驚くべき話だが)  
白い髪が生えていて(こめかみには月桂樹が茂っており)  
脳天から薔薇色の髪が生えていたのだ。  
その髪の本質が長く守られるほど  
ニーススの無傷の祖国と未来の王権を  
調和したパルカたちが確固たる神威で強めてくれる。

『キーリス』では、ニーススの命よりも王権に注目が移っている。『神話集』も同様である。そして『変身物語』でも「偉大な王権を保証するもの(magni fiducia regni, 10)」と書かれているのである。命か王権か—オウィディウスは後者を選択した。ニーススの髪が保証するものを彼の命ではなく王権とすると、スキュラの罪が強調される。すなわち、彼女は父の髪を切り取ったことで彼の命を奪っただけでなく、その王権を剥奪して国全体を滅ぼしたのである。彼女が犠牲にしたのは父ひとりではなくメガラに住む人々全員ということがよりはっきりと示される。実際、スキュラの最後の独白には「市民たちは当然私を憎んでいます(cives odere merentem, 116)」という一節があり、スキュラが手にかけて人数の多さが改めて読者に示されている。

次に、ミノスの人物像に注目したい。『ビブリオテーケー』および『地誌』に見られるミノスは、スキュラを自らの手で徹底的に罰した、冷酷な性格の持ち主とも言える。また『神話集』では、はっきりとした記述はないものの、「約束(fide)」というところから、ミノスはスキュラの恋心を利用して勝利を得た、狡猾な人物のように思われる。一方オウィディウスが書いたミノスは、罰するどころかスキュラから逃げるのである。ミノスとスキュラが直接対面するのはスキュラが父の髪を差し出すその時であるが、この時「彼女は怯えるミノスに話しかけた(quem ... adfata paventem est, 88)」とある。顔を合わせたその瞬間、既にミノスは怯えを見せている。そして愛を打ち明けたスキュラから「逃れた(refugit, 95)」のである。それを見たスキュラは「どこへ逃げるのですか(quo fugis? 108,110)」と二度問いかけ、彼が部下の者たちに「急ぐのを命じる(properare iubet, 138)」のを咎めた。スキュラへの処罰に積極的なミノスにはここにはいない。ここでのミノスは、人倫を侵すことを恐れなかったスキュラとは決して相容れない「き

わめて公正な指導者(*iustissimus auctor*, 101)」である。ミノスは父の髪を差し出すスキュラを見て、彼女が想いを遂げるために祖国全体を犠牲にしていることを悟り、その不敬を責める。王権を保証する髪がニーススの頭から離れた時、メガラはクレタに抵抗する力を失った。メガラの陥落はミノスの勝利を意味するが、ミノスは自分に利益をもたらしたとしても彼女の行いを褒めず、非難したのである。ミノスはスキュラが父親や祖国への *pietas*<sup>9</sup>を侵したことを責めている<sup>10</sup>のであり、いかなる時も倫理を守る公正な人物として描かれている。そんな彼にとって、スキュラの行き過ぎた愛情がもたらした行為は恐怖の対象でしかなかった。

ミノスが倫理に基づいて行動している一方、スキュラは恋のせいで理性を失った人物として書かれている。スキュラがミノスを見初め、ミノスの美しさがスキュラを目線から描かれると、「ニーススの娘は自分を保ち、正気であるのがやっとだった(*vix sua, vix sanae virgo Niseia compos / mentis erat*: 36-37)」と語られる。物語の始まりの時点で、スキュラは既に正気を失いつつある。その後葛藤を経て件の凶行に及び、スキュラはミノスの御前へ父の髪を差し出すも、受け取りは拒否される。そして前述したように、ミノスはスキュラを一切無視してクレタへと引き返した。この時無視されたスキュラは「荒々しい怒りへと移り、両手をさしのべて髪を振り乱し狂乱しながら(*violentam transit in iram, / intendensque manus, passis furibunda capillis*, 106-107)」ミノスへの恨み言を連ねたのである。彼女は恋に落ちてから変身するまで、すなわち物語の最初から最後まで、ほぼずっと正気を失った状態で行動していたと見ていいだろう。

私欲のために父一人だけでなく祖国全体を犠牲にしたスキュラと、彼女の行いを真っ向から否定してその狂気を恐れるミノスとは、それぞれ対極に置かれた人物である。読者がより理性的な人物とみなすのは、言わずもがなミノスの方であろう。スキュラは通常の読者が持つ倫理観や常識からはかけ離れた存在として描かれている。

### スキュラの行動は罪であったのか

スキュラの変身について考察する前に、そもそも一連の出来事の発端である「父ニーススの緋色の髪を切り取る」という行動をオウィディウスがどのようなものとして書いているかを確かめたい。

とはいえ改めて長文を連ねるまでもなく、オウィディウスは彼女の行動を罪と見ていると見ていいだろう。物語の後半部、すなわちスキュラがニーススの髪を切り取った場面以降、スキュラの行動あるいはスキュラの人格に対するオウィディウスの否定的な態度が、文章中に用いられた単語から読み取れる。以下でそれらを箇条書きで示す。

- ・スキュラが髪を切り取る瞬間に「何たる罪深きこと！(*heu facinus!* 85)」という作家自身の言葉の挿入あり
- ・切り取った髪を「不吉な戦利品(*praeda ... nefanda*, 86)」と表現
- ・ミノスへと髪を差し出すスキュラの手を「呪われた右手(*scelerata dextra*, 94)」と表現

<sup>9</sup> 『改訂版 羅和辞典』では「1 (神々への)敬虔, 信仰. 2 (神々からの)愛, 慈悲. 3 (祖国への)忠誠, 愛国心. 4 (家族・友人への)情愛, 孝心; 信義. 5 (一般に)好意, 親切。」とある。様々な意味を内包する単語であるため、今回はあえて日本語に訳することはしなかった。

<sup>10</sup> Fratantuono p.216

- ・ミノスがスキュラを「我々の時代の汚点(nostri infamia saeculi, 97)」と非難
- ・髪を切り取ったことを「罪(sceleris, 105)」と表現
- ・スキュラ自身が髪を切り取ったことを「罪(scelus, 111)」と言う
- ・スキュラが「不敬な女(impia, 128)」と自称
- ・再びスキュラ自身が髪を切り取ったことを「私の罪(crimine nostro, 129)」と言う

地の文においては四ヶ所、ミノスの呪詛に一ヶ所、スキュラの二度目の独白に三ヶ所という内訳になる。『変身物語』では一貫して公正な人物であるとされるミノスがスキュラを非難するのは当然であり、「汚点」という発言には彼の偏見も混ざっているだろうが、それを除いてもオウィディウスがスキュラの行動をどう考えていたか、またスキュラ自身がどう回顧したかは読み取れる。スキュラの二度目の独白の内容はおおよそがミノスへの恨み言から成っているが、その中でも自分の罪を認めていることになる。正気を失ってなお自覚できるほどに大きな罪だということであろう。そして彼女は「罰をお与えください(exige poenas, 125)」「私は死ぬにふさわしい(sum digna perire, 127)」と、同じ独白の中で誰へともなく訴えたのである。

#### スキュラの変身は罰であったのか

では、そんな彼女に訪れた変身という結末は、はたして彼女にとって罰となったのであろうか。彼女の行動がはっきりと罪として書かれたのに対し、変身の性格は曖昧である。

再三述べているが、彼女が変身後どうなったかを『変身物語』の記述から判断することはできない。ただし、考えられる展開は二つある。一つは、『農耕詩』や『キーリス』に見られたとおり、同じく鳥に変身した父に追われ続けるというもの。もう一つは、変身して得た翼でミノスのいるクレタへ飛んでいくというものである。

後者はかつてスキュラが最初の独白の中で「ああ、私はどれほど幸せでしょう、空中を翼で滑って行ってクレタの王の陣営に立つことができたなら。(o ego ter felix, si pennis lapsa per auras / Cnosiaci possem castris insistere regis, 51-52)」と願っていたがゆえにその可能性を捨てきれない。結果だけ見れば、彼女は「翼」を得ることはできた。そして結末が濁されている以上、「クレタの王の陣営に立つ」という願望も叶わなかったとは言い切れない。しかし、もちろん彼女の変身は彼女の意志で実現したわけではない。そして次のミノスの言葉も踏まえると、父の急襲を逃れてクレタへ行くことなどできなかったのではないかと思わされる。

di te summoveant, o nostri infamia saeculi,  
 orbe suo, tellusque tibi pontusque negetur.  
 certe ego non patiar Iovis incunabula, Creten,  
 qui meus est orbis, tantum contingere monstrum. (97-100)

神々がお前を、ああこの世の汚点よ、ご自身の世界から  
 追い出してくださるように。大地も海もお前を拒めばよい。  
 当然私は、ユピテルの生まれた、私の世界であるクレタが  
 そんな怪物に触れるのを許しはしないぞ。



大地と海、すなわち人間の住む世界全体からスキュラが追い出されるようにとミノスは願った。加えてスキュラを「怪物」と呼び、自国クレタと「怪物」が接することを拒否した。するとスキュラは翼を得たとしてもクレタには居られないのではないか。ただし、ミノスの呪詛にはある場所の欠落があった。それが *aura*(空)である。スキュラはこの呪いを受けて大地にも海にも居られなくなったが、*aura* という居場所は残されたと考えられる。

では、スキュラの二度目の独白における訴えは聞き入れられたのだろうか。前項の末尾で引用したとおり、スキュラは「罰をお与えください(*exige poenas*, 125)」、「私は死ぬにふさわしい(*sum digna perire*, 127)」と訴えていた。スキュラが何を罰と考えていたか定かではないが、ここでは死を意識しているようである。死を罰と考えていたのであれば、彼女の訴えは届かなかったことになる。彼女は鳥に変身して、生きたままにいるのだから。

ミノスが呪いの言葉に含み忘れ、スキュラの新しい居場所となった *aura* は、本稿冒頭でも引用した箇所にも登場している。ここで再度引用する。

*illa metu puppim dimisit, et aura cadentem  
sustinuisse levis, ne tangeret aequora, visa est. (148-49)*

彼女は恐怖で船から手を離した。落ちていく彼女を軽やかな空気が海面に触れぬよう支えたように思われた。

この箇所が曖昧にしているのは彼女の変身後の展開に限らない。そもそもここで曖昧になっているのは *aura* の考えである。*aura* がスキュラを「支えた」理由は二種類考えられるだろう。その内容は Anderson も述べているとおりである。一つは「海水を汚すのを防ぐため」。こちらであったなら *aura* はミノスに肩入れしていたことになる。ミノスの呪詛の中で海はスキュラが接触できない場所になったからだ。もう一つはスキュラを「溺れることから救うため」である。こちらであれば単純にスキュラに同情を寄せたことになる。さらに、*aura* は「支えたように思われた」のであって、「支えた」と断言されてはいない。*aura* の考えはこうして二重に理解しがたくなっている。この不明瞭さが、スキュラの変身は罰であったのか、スキュラは変身後どうなったのかという疑問を一緒にたにして煙に巻いているのである。

このように、スキュラの変身は彼女にとって罰となったのか、苦難から逃げ出す手段となったのかは、この物語の全体を通して考えても判断できない。罰だった、いや脱出だったと今までの研究者は盛んに論じてきたが、この二つのどちらかを選ぶことは不可能だと言わざるをえない。ただし、こう考えることはできる。スキュラは鳥に変身し、どっちつかずの態度を取る *aura* の中に住まう者となった。この結果が彼女にとって「脱出」となったか「罰」となったかはわからない。彼女もまたどっちつかずの状態に陥ってしまった。この *aura* という新しい居場所こそ、罰せられたでも苦境から抜け出せたでもない、スキュラのどっちつかずで宙ぶらりんな状態を象徴しているのではなかろうか。

## 結論

王権を保証するという父の髪を切り取り、敵国の王であるミノスに差し出すというスキュラの行為は『変身物語』の中でも明らかに罪と位置付けられていた。公正で倫理を守る人物であ

るミノスはもちろん彼女を拒否したが、その罪の大きさは正気を失った彼女自身でさえも認識できるほどであった。他の文献資料と比べると、オウイディウスが彼女をより罪深い人物として描き出そうとしていたことがはっきりとわかる。彼女は私欲のために、父一人だけでなく国全体を滅ぼした女だった。彼女が手にかけてしまった人数は計り知れない。

しかし、その結末としてもたらされた鳥への変身はその罪に対する罰だと断言できるものではなかった。スキュラの神話を知る当時の読者はおそらくスキュラに罰が下されることを想定したはずだが、オウイディウスは彼女の将来について明言しなかった。また、スキュラの変身や将来を示唆するいくつかの箇所を分析しても、今までの研究者が述べてきたような「罰」あるいは「脱出」のどちらかだけを読み取ることは不可能だった。彼女の変身からは、変身を匂わせる箇所も含めて、常にどちらの要素も読み取れたのである。

一方、彼女と同じくどっちつかずの状態にあったのが、彼女の最終的な居場所となった aura だった。aura はミノスの呪いを聞き入れてスキュラの穢れが海水を汚さないようにしたとも、スキュラが溺れないように助けてやったとも考えられる。aura の真意もまた『変身物語』では明言されていない。だが、このどっちつかずの態度を示す aura がスキュラ最終的な居場所になったということは、スキュラが「罰」でも「脱出」でもない第三の、いわば宙ぶらりんの状態に陥ったことを象徴していると考えられる。